

木曽実習レポート(2010年8月)

今回、木曽研究所にて開催された木曽実習に参加させて頂きました。まず、木曽研究所が戦前から存在し、現在まで研究のための施設として利用されていること、さらに戦前の記録が残されていることに驚きました。同じ地点および地域で長期に渡って継続して調査し、記録し続けることの貴重さや、当時、交通の便がとて悪いであろうこの地で調査を行ってきた先人たちに非常に頭が下がる思いでした。

現在、私が行っている博論研究の対象河川は、今回の実習を行った黒川よりもはるかに小規模ではあるものの、黒川の支流、アカシオ沢と比べると広い河川です。日頃のフィールドと違う環境ということで、なにかと興味をそられる素材がありました。瀬 淵構造にしてもスケールが大きいので、さらに微小な異なる構造が分布し、複雑な環境が形成されているのではないかと、それぞれの微小環境で生息する水生昆虫等の分布も異なっているのだろう、などと考えながら川の中を歩いていました。川の中を歩く時も、上空を森林で覆われていないため河川内の一次生産が高く、そのためコケに覆われた石に足を滑らせながら移動しなければならぬこともまた、河川の規模や周辺環境による違いを感じさせました。

その石に付着しているコケにもミクロの世界では階層構造があり、その階層構造の違いによってまた石表面の環境も異なり、水生昆虫等の利用の仕方も異なることが、講義の話題に出ました。つい人間サイズの捉え方で空間を判断してしまう私にとって、このような話題はミクロの生物が把握しているであろう空間の捉え方を想像させられる刺激になりました。

水生昆虫の種類は、比較的サイズの大きな石が存在したこともあり、ヒラタカゲロウ科の幼虫が多く確認されました。カゲロウ目は学名 Ephemeroptera が指すとおり、成虫は繊細な体で短命といわれています。しかし、幼虫もまた繊細な体を持つ種類があり、土砂と一緒に採取すると潰されて変形したり、鰓、足、触覚などが取れてしまったりと、種同定をさらに困難にしまいます。また、死体だけではなく、生体を観察することも水生昆虫の新たな一面を見せてくれました。顕微鏡のレンズを通して、ナガレトビケラ科の幼虫が私の持つピンセットの先端をその大顎で攻撃する獰猛な姿は、生体でなければ知り得ない情報です。フィールドから近い場所に研究所があるのは、生体観察が容易にできる利点だと思います。

私自身は、わずか3日間のみ参加となってしまう、私が木曽研究所を後にする頃には雨が降り、また台風が日本に接近しつつある時であったため、その後の自由研究に支障が無かったか心配ですが、パイタリティあふれる他のメンバーならなんとか乗り越えられたのではないかと思います。充実した野外実習の機会を賜り、お世話になりました先生及びTAの皆様、毎回の食事を作って頂いた方々、ありがとうございました。これからも、木曽研究所で得られたデータが継続的に蓄積され、社会に貢献することを希望します。